

## 大分県の埴輪

高橋 徹

## (一) はじめに

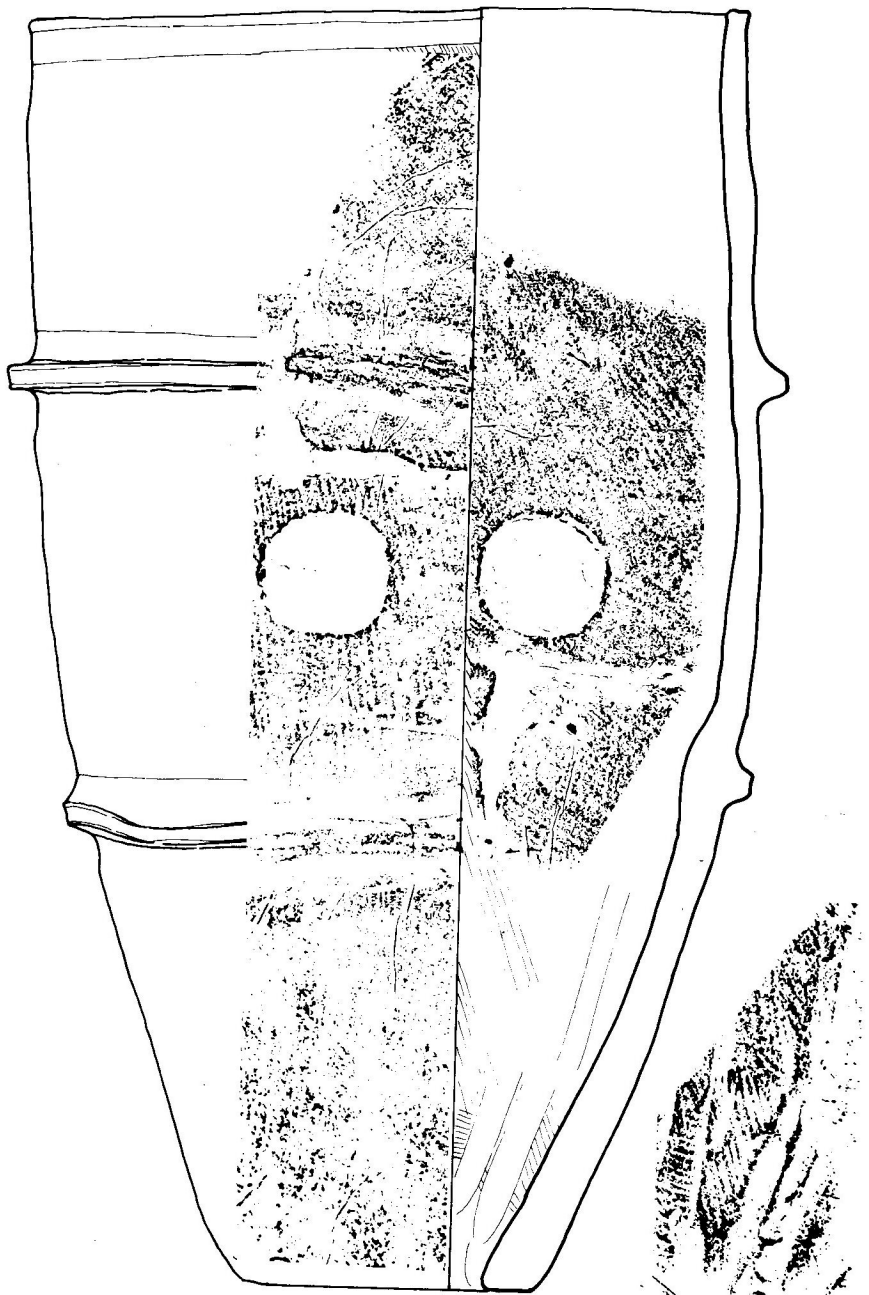
『日本書紀』垂仁天皇三十二年の条に、土師氏の祖とされる野見宿祢が悲惨な殉葬に代わるものとして、埴輪を考案した旨の記事がある。これをそのまま史実とみなすわけにはいかないというのが、早くから学界の定説であった。現在では、埴輪は弥生時代後期のある種の器台および壺形土器に起源を持つことが明らかになっているが、その変遷や伝播および生産等、残された課題も多い。各地域における、埴輪資料の整理・報告が待たれるゆえんでもある。

小稿では、若干の埴輪資料の紹介を中心に、従来あまり注目されることのなかった県下の埴輪について、その問題となる点にも簡単に触れてみたい。

## (二) 古墳出土の埴輪

## ○ 下山古墳出土の埴輪 (第1図①)

下山古墳は臼杵市大字諏訪字下山に所在の、全長六一メートル、後円部径三五メートルを測る前方後円墳である。墳丘には葺石、円筒埴輪、短甲形石製品がみられ、後円部の家形石棺からは人骨、仿製二神二獣鏡、鉄刀、鉄鋌等が出土している。調査報告書は公表されていないが、三〇数枚に及ぶ鉄鋌については最近、小田富士雄氏による詳細な研究報告が発表されており、古墳に対する関心はとみに高まっている。



(第1図④) 下山古墳出土埴輪

実測図

(縮尺 $\frac{1}{4}$ )

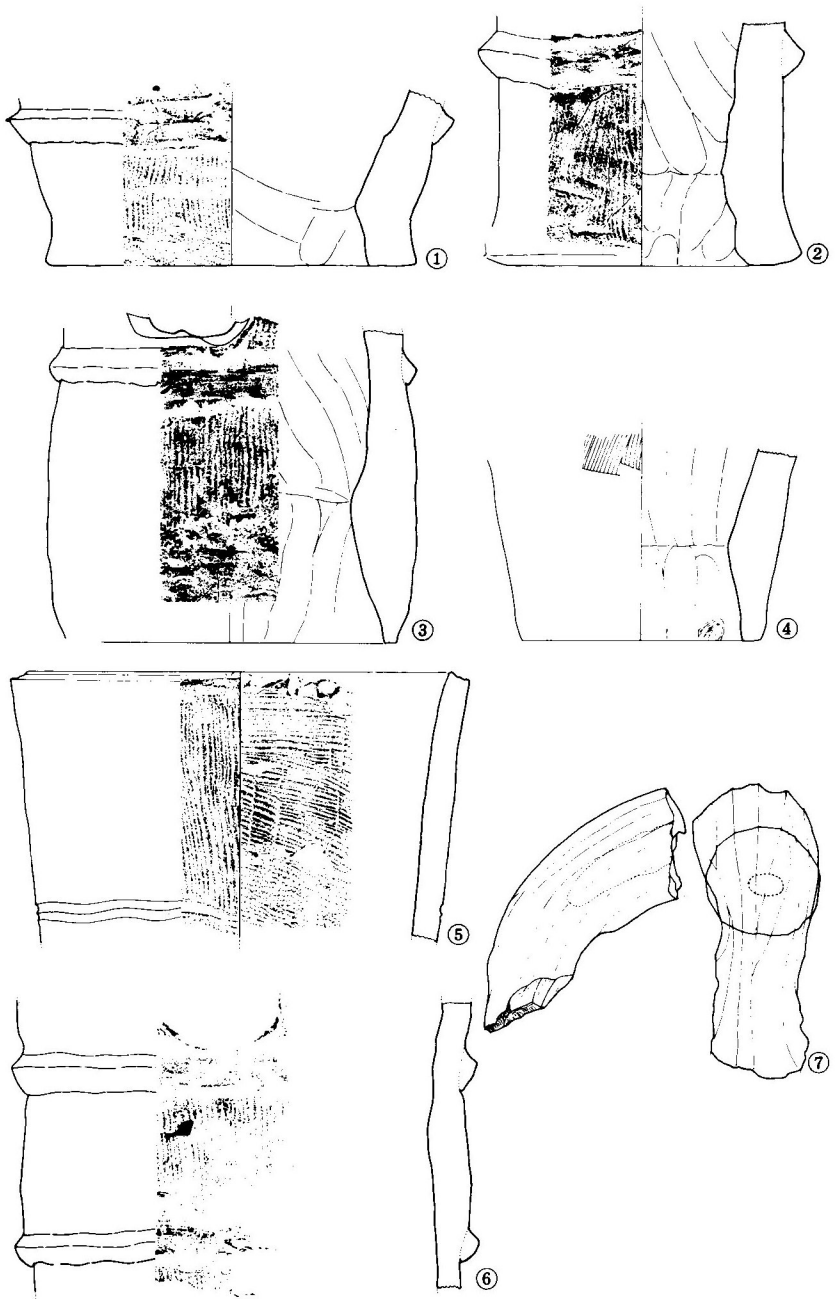
①は現在臼杵市立図書館に保管の円筒埴輪で、高さ四三センチ、口径二四センチ、底径一〇センチと比較的小形である。口縁部は直立するが、胴部下半から底部へかけて大きくすぼまる。二条の幅狭いタガをめぐらし、2段目に径四・二センチの円形透孔を一对穿つ。内外面とも粗雑な刷毛目を施すが、内面下半部には指削り<sup>③</sup>が行なわれている。外面には全面丹塗りがみられる。以上の特徴は、福岡県八女市所在の石人山古墳をはじめとする、下山古墳と同時期に比定されている諸古墳出土の埴輪に例をみないもので、当古墳の墳丘規模や副葬品の内容を知る者にとって意外の感を抱かせる貧弱な埴輪といえよう。正式に訓練された埴輪製作工人の作品とは認め難い。ただ、六世紀代の埴輪になると殆んどみられなくなる外面の丹塗りが施されていること、タガも整美とは言えないが、上・下面のナデ付けが強く無く、古式のものに近いことを考慮すると、主体部、副葬品等から推定されている当古墳の年代観（五世紀後半代）は埴輪編年の立場からみても妥当なものと思われる。石製短甲や主体部の家形石棺等一見、筑後地方の古墳文化との関連を示すと思われる要素を持つ下山古墳であるが、紹介した埴輪に関しては、同地方のものとの直接的な系譜関係は認められないようである。

○ 亀都起古墳出土の埴輪（第2図①～⑦）

玖珠町大字大隈字亀都起所在の亀都起古墳出土の埴輪である。古墳は弥生時代後期～古墳時代にわたる住居跡や方形周溝墓が調査された「おごもり遺跡」<sup>④</sup>の五〇〇メートル北にあり、玖珠盆地を西に貫流する玖珠川左岸の台地上に立地する。全長約四〇メートルの前方後円墳で、一部に周濠が残る。前方部は後円部より低く、南を向く。未調査で、主体部は勿論、遺物も今回紹介の埴輪以外は知られておらず、現在のところ盆地で唯一の前方後円墳である。

埴輪は一九七七年三月三〇日、圃場整備工事中のブルドーザーが、古墳後円部くびれ部付近の周濠を削った際出土したもので、玖珠町教育委員河上清久氏によって復原整理されている。円筒埴輪、人物埴輪、動物（馬か）埴輪がある。

⑤ 円筒埴輪（第2図①～⑥）①～④は底部付近の破片で、①、②は器厚二・五～三センチの体部が厚みを変えることなくやや外反する底部へ続く。これに対して③、④は内傾気味の底部を持ち、器壁も底面へかけて薄くなっている。明らかに



六五

(第2図) 亀都起古墳出土埴輪 実測図

製作者もしくは製作グループの違いを示すものであろう。⑥は胴部の破片で、径二二・四センチに復原した。⑤は口径二四センチ、器厚一・五センチを計り、口縁端部下一二センチの部分に浅い二条の沈線がある。口唇部を幅8ミリほど横ナデし、口縁端部は棒状のもので押捺されている。

人物埴輪(第②図7)⑦は人物埴輪の腕と思われるもので、長さ一四〜一五センチを計る。ゆるやかに湾曲しており、手首から手のひらにかけての部分で破損している。上半部は径一・五〜二・〇センチの楕円形をした空洞がみられ、肩部との接合に使用されたものであろう。表面は指削り調整が行なわれており、色調、胎土は円筒埴輪と同じである。

この他馬形埴輪(?)の脚部と考えられる小円筒状の埴輪が出土している。

以上極めて少量の埴輪ではあるが、個体差を超えた共通の特徴を列挙すると次のようになる。

- ① 底径は一三〜一九・六センチと一〇センチ台におさまり、概して小形である。
- ② タガは全て稜の鈍い断面三角形を呈し、タガとタガとの間隔は一〇センチ内外である。
- ③ タガ取りつけが粗雑に行なわれており、特にタガ下面のナデつけ不良が甚しい。
- ④ 透孔は不整の楕円形である。

⑤ 色調は赤褐色で焼成はややもろい。胎土には砂粒の他に、県下の弥生式土器、土師器に普遍的にみられるある種の鉱物も含まれており、それらの日常土器に使用するものと同様の粘土を使用しているらしい。

⑥ 外面はタテ刷毛目、内面は刷毛目および指ケズリ調整を行なっている。

①〜③にみられるように、小形化、タガの退化が進んだもので、筆者の北部九州を中心とした埴輪編年試案のⅥ期に属するものと考ええる。円筒埴輪、人物埴輪、馬埴輪の組合せもこれに矛盾しない。従って、埴輪でみる限り、私見では亀部

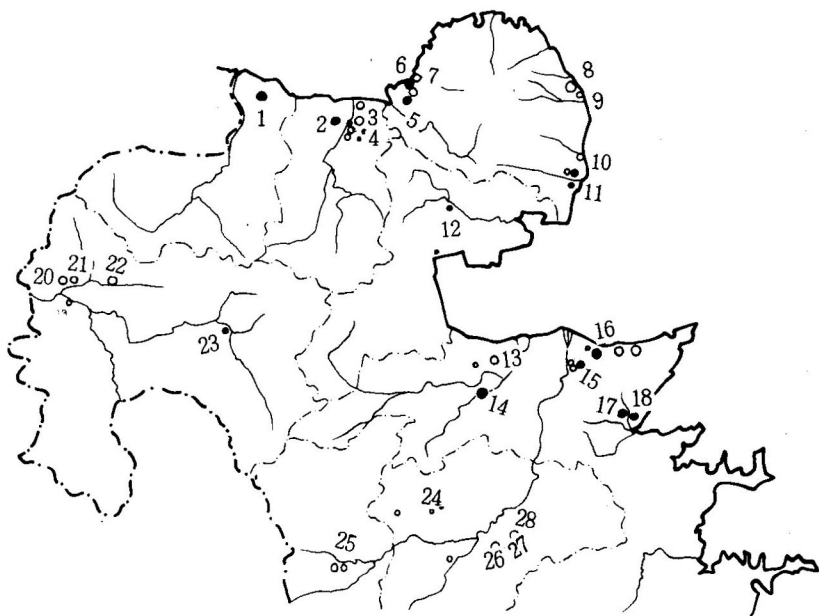
起古墳の築造時期は六世紀後半に比定し得よう。

大分県下の埴輪出土地は一五ヶ所が知られており、うち、前方後円墳が一二例、円墳二例、性格不明一例となっている。前方後円墳の独自のとも言える埴輪使用の状況がうかがわれよう。

清水宗昭氏によると、県下の前方後円墳の総数は四七基を数えるというが、そのうちの七五%からは埴輪出土の報を聞かないのである。例えば九州で最古式の前方後円墳の一つに挙げられている宇佐市赤塚古墳や、五世紀代の築造時期が考えられている同市角坊古墳、同車坂古墳、横穴式石室を持つ六世紀中葉の鶴見古墳には埴輪は使用されておらず、宇佐地方で埴輪を持つ古墳は現時点では駅館川左岸の葛原古墳(帆立貝式)のみである。前者の古墳群は川部・高森古墳群と総称されるもので、宇佐国造家累代の墳墓群と考えられており古墳時代を通して在地の支配者であり得た首長の築造したものである。筑紫国造家およびその一族の墳墓群と言われる福岡県八女市の人形原古墳群(石入山古墳、岩戸山古墳を含む)や福岡市の那河川中流域に展開する古墳群(老司古墳、安徳大塚他)、同市今宿地区の古墳群(鋤先古墳、丸隈山古墳、今宿大塚)等その地域を代表する首長系列の古墳群では埴輪の使用が必ず行なわれていることを考えると宇佐の状況は極めて興味深い。

大分県下で埴輪を持つ古墳は国東半島から佐賀関半島にかけての海岸部に集中しており、とりわけ「海部郡」およびその周辺地域が注目される。県下で最初に埴輪が採用されるのもこの地域である。すなわち五世紀代になると大分市坂ノ市野間一号墳<sup>⑬</sup>に「壺形埴輪」が樹立される。調査者の小田富士雄氏は全長四メートルの前方後円墳と考えており、墳丘には葺石が敷かれ、主体部は後円部中央に置かれた組合式箱式石棺である。「壺形埴輪」は後円部くびれ部付近に据えられていたらしい。外反した口縁部の内側にはへら描による不連続の施文があり、底部はすばまり気味に細くなっている。報告書の図で見る限り口縁部は普通見られる有段の二重口縁ではなさそうである。

五世紀中葉になると大分平野に円筒埴輪を持つ御陵古墳が築造されるが埴輪は極く少量であったらしい。同じ頃のものとして下山古墳と同様の石製短甲を持ち、船形石棺を主体部とする臼杵市稲田の臼塚古墳がある。円筒埴輪と器財埴輪を



清水氏原図  
速見考古5号より

● 埴輪 出土地

○ 前方後円墳

- ① 龜山古墳 ② 葛原古墳 ③ 赤塚古墳 ④ 寺の前遺跡(表探)  
 ⑤ 鑑堂古墳(円墳?) ⑥ 野内古墳 ⑦ 真玉大塚 ⑧ 狐塚古墳  
 ⑨ 番所ノ鼻古墳 ⑩ 築山古墳 ⑪ 塚山古墳 ⑫ 大原古墳(円墳)  
 ⑬ 大臣塚古墳 ⑭ 御陵古墳 ⑮ 野間1号墳 ⑯ 龜塚古墳 ⑰ 臼塚古墳  
 ⑱ 下山古墳 ⑲ 護願寺古墳 ⑳ 天満1号 ㉑ 同2号 ㉒ 城山古墳  
 ㉓ 龜都起古墳 ㉔ 坊ノ原古墳 ㉕ 七ツ森古墳群 ㉖ 秋葉鬼塚  
 ㉗ 重政古墳 ㉘ 道ノ上古墳

(第3図)

出土する。また別府湾を眼下に見降す丘陵上に立地する。海部郡最大の規模を誇る坂ノ市字宝来の亀塚前方後円墳からも埴輪が表採されている。前方後円墳と埴輪の関係という観点で、宇佐市川部・高森古墳群のように埴輪の使用をみないものを今仮りに「宇佐類型」、筑前、筑後のそれを「筑紫類型」とすると、海部郡を中心とする地域には、「筑紫類型」の古墳が築かれていることになる。これに対して、正確な墳丘調査が行われておらず断言はできないが、日田盆地(天満一・二号墳、城山古墳、護願寺古墳)<sup>15</sup>や竹田盆地(七ツ森古墳群)、三重盆地(道ノ上古墳、三重大塚、重政古墳他)<sup>17</sup>等の山間部には埴輪を持たない「宇佐類型」の前方後円墳が営まれており、海部周辺地域と際立った対照を示すのである。

「筑紫類型」の地域では、埴輪がある種の権威を表わすものとして扱われ、原則的には前方後円墳およびこれに準ずる大形円墳を築き得た広域地域の支配者層にのみ使用が認められており、またそのような首長ならば必ず埴輪の使用を行ったと考えられる。

ところで中司照世氏は、越前・加賀・能登の三地方内にある四、〇〇〇基余りの古墳の中で埴輪を使用したものは四一基のみであるという事実を踏まえて、同地方において埴輪の使用が非常に限定されたものであり、地域集団間に使いわけが認められることを指摘している。<sup>18</sup>さらに埴輪は地方首長墓(権)の成立に伴って出現し、地方首長墓(権)の移動に付随して遷移するという見解を述べている。九州の場合よりさらに限定され、権威の象徴としての機能をより強めた埴輪の姿がここにある。

③ 「宇佐類型」とした古墳群では当初から埴輪の使用が行われておらず、埴輪と古墳の関係は各地方、各地域においてそれぞれ異ったあり方を示すようである。県下の古墳群に見られる「二類型」の意味するものは果して何か?今後県内の古墳研究を進める上で解決されねばならない課題の一つであることを強調して小稿の結びとしたい。

△付記▽ 埴輪資料の実測、公表に格別の御配慮を頂いた河上氏および県文化課の同僚に謝意を表す。



- ① 近藤義郎・春成秀爾「埴輪の起源」『考古学研究』一三一—一九六七年
- ② 小田富士雄「大分県下山古墳出土の鉄釘」『古文化談叢』第二集 一九七四年
- ③ 吉田恵二氏の次の定義に従う。(「指ケズリ」は「ヘラケズリ」ほど平面的でも無く、粘土を完全に削り取ってしまうものでも無い。指で粘土を主に上下方向に伸ばすことによって粘土紐相互の接着を強化し同時に粘土紐輪積みによる器壁の凹凸をならし、厚みを均一化することに重点を置くものである。)
- ④ 渋谷忠章「おごもり遺跡」玖珠町教育委員会 一九七七年
- ⑤ 埴輪出土のいきさつについては河上氏の御教示による。
- ⑥ 高橋徹「九州の埴輪概観」『二子塚遺跡』佐多茂他 一九七六年
- ⑦ 清水宗昭「大分県前方後円墳一覽」『速見考古』第五号 一九七六年
- ⑧ 大分県教育委員会「宇佐風土記の丘調査報告」一九七三年
- ⑨ 賀川光夫「大分県に於ける三つの竪穴式石葬を有する古墳」『西日本史学』一五 一九五三年
- ⑩ 小田富士雄「磐井の反乱」『古代の日本3—九州—』一九七〇年
- 八女市教育委員会「岩戸山古墳」一九七二年
- ⑪ 老司古墳調査委員会「老司古墳調査概報」一九六九年
- 井上裕弘「危機の安徳大塚を守れ」『ふるさとの自然と歴史』五号 一九七一年
- ⑫ 小田富士雄他「丸隈山古墳」福岡市埋蔵文化財調査報告書第一〇集 一九七〇年
- 柳沢一男「今宿大塚古墳」『福岡平野の歴史・緊急発掘された遺跡と遺物』福岡市歴史資料館図録第二集 一九七七年
- ⑬ 賀川光夫・小田富士雄「野間古墳群調査報告」大分県文化財調査報告第一三三号 一九六七年
- ⑭ 小田富士雄「御陵古墳緊急発掘調査」大分県文化財調査報告第二四号 一九六八年

- ⑮ 大分県教育委員会「日田市玖珠町埋蔵文化財分布一覽」 一九七三年
- ⑯ 賀川光夫「大分県竹田市戸上七ツ森古墳」大分県文化財調査報告第四集  
註⑦
- ⑰ 中司照世「加賀における古墳時代の展開」『古代文化九』 一九七七年

県教育庁文化課